

やがて徒歩で老翁嶺を越えるのであるが、どこをどう歩いたのか、どこに着いたのか、夜中に声を出さずに、前の人に遅れまいと夢中で山越えした苦しい思いだけが残った。生と死の集団行進だった。

また無蓋車に乗り、錦州に九月六日、コロ島に九月十一日に着いた。

十月二日佐世保に上陸。

思い出

山形県 小玉 静 江

満州国協和開拓団にソ連兵の自動車が進まるとサイレンが鳴り、女の人は逃げろという合図である。私達勤務奉仕隊の者はいつでも逃げられる準備をしていた。

ある寒い晩、サイレンが鳴り響いた。靴を履いたが紐を結ぶ暇もなく走り出した。霜柱が立っている真夜中、畑の中で靴紐を踏んでは転び、起きては転びを繰り返して、しまいには靴を手に、裸足で隣の昭栄部落に着いた。

昭栄部落の人々は親切にも風呂の湯で足を洗わせてくれた。しかし、いきなり風呂の湯で暖めたためズキンズキンと一時間ばかりは痛くてたまらなかった。

ソ連兵と交渉の結果、私達は連れて行かれなかったが、学校に集まり、最後の夜が来たのだと手造りの槍を持たせられ、死ぬための青酸カリの薬をもらったときは、体の中までズーンと冷たくなった。夜が明けたら死ぬのかと思ったとき、国にいる母の顔が目浮かび、とめどなく涙が流れたのを忘れることができない。

春になってようやく治安もよくなって団本部からチチハルに出るといので私と太田キクさんの二人が一緒に歩いていくことになった。

チチハルでは二か月間八路軍の炊事をした。女だけの二人で心細い毎日である。六畳間でカーテンもないガラス窓から毎晩お月様が皎々と照らすのでした。ある晩、匪賊が来たと知らされて窓際に頭をくっつけて外から見えぬようにして寝たけれども南京虫に食われて朝まで眠れないこともあった。

昭和二十一年十月三日朝、チチハルから一か月余か

かって、ようやく楯岡駅に着いたときの嬉しさ、本当に日本に、故郷に帰って来た実感で涙がとめどなく流れたのは今も鮮やかに印象づけられている。

楯岡町役場に行ったところ、偶然にも渡辺助役は出勤していた。思わず助役さんと声を上げた。語ったり聴かれたりしたが、私達は協和開拓団最初の引揚者だった。みんなに囲まれてこれまでのことを話したのだった。楯と齒ブラシを貸して貰い、白い米のご飯を魚で食べさせて貰ったが、一年あまりも食べていなかった古里のあのときの味は忘れられない。

その後助役さんを中心に勤労奉仕隊の家族の皆が集まったので満州開拓現地の情況などを話したのだった。

いまこうして平和な幸せな生活をしているが、四十五年前の苦しかったことはたくさんあったが、団員の皆様から本当にお世話になったことを心からお礼を申し上げます。

敗戦の苦悩から発奮

広島県 大本 啓 二

昭和二十年八月十五日、満州国三江省湯原縣でラジオの受信不能で詳しいことはわからなかったが大体戦況の不利は察していた。九時頃二人の憲兵が四人しかいない湯原駅舎の日本人に対して「重大な命令である」と前向き、後刻通達あるまで貨物列車の移動を許さぬ、と言いき、残り開拓団方面に馬を飛ばして立ち去っていった。

午後四時頃に百十人ほど思い思いの手回り品をまとめて駅前に集まった、開拓団の人達も憲兵の気配で大体敗戦を察していた。私は今まで家族同様だった猫や犬も私や開拓団の家族にすがりついて離れない悲しさが強烈に印象づけられている。

いよいよ、午後六時貨車に乗って出発合図に動いた、今まで協力してくれた満人達は別れを惜しんで、見えなくなるまで手を振って見送ってくれた。開拓団から追い